



TITLE:

朱子語類讀書法篇譯注(二)

AUTHOR(S):

興膳, 宏; 木津, 祐子; 齋藤, 希史

CITATION:

興膳, 宏 ...[et al]. 朱子語類讀書法篇譯注(二). 中國文學報 1994, 49: 119-152

ISSUE DATE:

1994-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/177567>

RIGHT:

朱子語類讀書法篇譯注 (二)

興膳宏
京都大學

木津祐子
同志社女子大學

齋藤希史
京都大學

47 某最不要人摘撮。看文字、須是逐一段、一句理會。賀孫。

わたしは、拾い読みは絶対にしてほしくない。文章を読むときには、一段ごと、一句ごとに取り組むべきだ。〔葉賀孫〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

48 讀書是格物一事。今且須逐段子細玩味、反來覆去。或一日、或兩日、只看一段、則這一段便是我底。脚踏這一段了、又看第二段。如此逐旋捱去、捱得多後、却見頭頭道理

朱子語類讀書法篇譯注 (一) (興膳・木津・齋藤)

都到。這工夫須用行思坐想、或將已曉得者再三思省、却自有一箇曉悟處出、不容安排也。書之句法義理、雖只是如此解說、但一次看、有一次見識。所以某書、一番看、有一番改。亦有已說定、一番看、一番見得穩當、愈加分曉。故某說讀書不貴多、只貴熟爾。然用工亦須是勇做進前去、莫思退轉、始得。大雅。

讀書は、「物に格^{いた}る」の一事に盡きる。まず段ごとにきめ細かく味わい、それを繰り返しおこなうこと。一日でも二日でもひたすら一段を読めば、その一段は自分のものになる。その一段を足がかりにして、さらに次の段を読むのだ。このように順を追って積み重ねていき、十分積み重ねれば、一つ一つの道理がすべて現れて来る。この努力を日頃の思索の場に行い、すでに理解したものを何度も考え直してみれば、おのずから悟るところがあつて、あれこれ段取りする餘地はないのだ。書物の句法や義理は、とにかくこのようにして解き明かしはするが、一度読めばそのつど見識は深まるものだ。だから、わたしの著書でも、読む度に改めるところが出てくる。すでに考えが定まった後は、

讀むたびにそれがしっくりきて、いっそう明晰になっていく。そこで、わたしは、讀書では多讀が大切なのではなく、熟讀こそが大切だ、と言うのだ。ただ、努力する際には、大膽に進むような心がけ、退くのは考えぬこと。〔余大雅〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本・推↓崖 勇做進前去→勇做近前去

〔注〕「格物」は、「致知」とともに、『大學』の重要な教への一つ。『語類』では「大學二 經下」(一五)に多くの紙幅を費やして議論され、いづれも本條と密接に連關する言ばかりであるが、簡潔にその含意を述べるものとしては、「窮理格物、如讀經看史、應接事物、理會箇是處、皆是格物。」(一五・284)や、「格物、是物上窮其至理。致知、是吾心無所不知。格物、是零細說。致知、是全體說。」(一五・291)などが挙げられよう。

「安排」は、ことさらにあれこれ段取りをつけること。朱子と同時代の陸游にも「先師有遺訓、萬事忌安排。」(陸游「兀坐久散步野舍」『劍南詩稿』卷五五)ということばがあるが、以下に挙げる數例からもわかるように、朱子の考える學問のあるべき進め方においても、忌むべき態度とされた。

「問、如何是倫序。曰、不是安排此一件爲先、此一件爲後、此一件爲大、此一件爲小。隨人所爲、先其易者、闕其難者、將來難者亦自可理會。」(『總論爲學之方』八・140)

「公依舊是要安排、而今只且就事物上格去。……若須待它自然發了、方理會它、一年都能理會得多少。聖賢不是教人去黑淬滓裏守著。」(『大學二 經下』一五・286)

「曲禮三百、威儀三千、皆是人所合當做而不得不然者、非是聖人安排這物事約束人。」(『大學五 或問下 傳五章』十八・299)

「謂諸生曰、公說欲選善改過而不能、只是公不自去做工夫。

若恁地安排、只是做不成。如人要赴水火、這心才發、便入裏面去。若說道在這裏安排、便只不成。」(『訓門人九』一二一・2924)

「推」「逐旋推」は、緊密に努力を積み重ねていくことを言い、「推」は現代語ではピッタリくっつくことを言い表す場合にも用いられる。「力行」(一三・285)に「初學則要牢剗定脚與他推、推得一毫去、則逐旋推將去。此心莫退、終須有勝時。」と見えるのが、本條ともかなり近い文脈での用例である。この語は、「大學五 或問下 傳五章」(一八・292)の「今日格一件、明日格一件。遇事時、把捉教心定、子細體認、逐旋推將去、不要放過。」や、「大學二 綱領」(四・283)の「讀大學、且逐段推。看這段時、似得無後面底。看第二段、却思量前段、令文意聯屬、却不妨。」などの例からもわかるように、『大學』の「格物」と密接な縁語關係にある語でもある。

「頭頭」は、一つ一つすべて、という意味。『語類』での用例は以下の通り。

「學者須是求仁、所謂求仁者、不放此心。聖人亦只教人求仁。

蓋仁義禮智四者、仁足以包之。若是存得仁、自然頭、頭、做着、不用逐事安排。」(性理三 仁義禮智等名義「六・113)

「學者工夫、但患不得其要。若是尋究得這箇道理、自然頭、頭、有箇着落、貫通浹洽、各有條理。」(總論爲學之方「八・113)

「聖人千言萬語教人、學者修身從事、只是理會這箇。要得事物物、頭、頭、件件、各知其所當然、而得其所當然、只此便是理一矣。」(論語九 里仁篇下「二七・678)

「某書」とは、具體的には朱子『四書集注』などを指すと考えてよい。そしてそれをしょっちゅう修正せねばならない、という本條の發言と同趣旨の言は、「語類」の中では、「大學一綱領」(一四・283)の「解文字、下字最難。某解書所以未定、常常更改者、只爲無那恰好底字子。把來看、又見不穩當、又著改幾字。所以橫渠說命辭爲難。」や、同章(一四・283)の「大學一日只看二三段時、便有許多修處。若一向看去、便少。不是少、只是看得草草。」などで表明されている。

これまで見てきたように、この條では、『大學』に組み組む際の心得を述べる箇所と重複する言辭が多い。そもそものは『大學』を読む上での教訓を、ここに取り込んだものかもしれないが、これは、朱子の中に、『大學』とは、四書の中で最も根本的な教えを説き、學習者が最初に讀むべきものとの意識があったことを考えれば、納得のいくことである。

なお、本條と重なることばは、『朱子讀書法』卷一「循序漸進」に、「讀書是格物一事、今且須逐段子細玩味。」また、卷三

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

には、「又曰、讀書是格物一事。」と記錄される。

(記錄者) 余大雅(一一三八〜八九) 字は正叔、信州上饒縣の人。『師事年攷』189

49 讀書、且就那一段本文意上看、不必又生枝節。看一段、須反覆看來看去、要十分爛熟、方見意味、方快活、令人都不要去看別段、始得。人多是向前趨去、不曾向後反覆、只要去看明日未讀底、不曾去紬繹前日已讀底。須玩味反覆、始得。用力深、便見意味長、意味長、便受用牢固。又曰、不可信口依希略綽說過、須是心曉。寓。

「讀書するには、まずはその一段の本文の意にそって讀み、あれこれ枝葉のことを考えるな。一段を讀むには、繰り返し讀んで、十二分にじっくりこなれるようにすること。それでこそおもしろみがわかり、氣分がすっきりして、もう他の段は讀もうと思わなくなる。人はとかく先へ先へと急ぎがちで、後ろを振り返ろうとはしない。明日の讀んでいない部分へ進むばかりで、前日の讀んだところを反芻して讀もうとしない。繰り返し味わってこそよいのだ。深く努力すればおもしろみがよく分かり、おもしろみがよく分

かればしっかり身につけることができる。」またおっしゃった。「口に任せて輕々しくしゃべってはいけない。必ず心でさとらねばならない。」〔徐寓〕

〔校勘〕朝鮮古寫本 令↓今 「方快活」以下が、底本では「孟子十 盡心上」(六十・144)の「廣土衆民章」第七條最終部分に見える「仁義禮智根於心、只根字甚有意。如此用心、義理自出。季札」に差し替わっている。

朝鮮古寫本 依希↓依儒

〔注〕「生枝節」は、横道にそれること、あれこれ氣の散る様子をいう。「生枝蔓」に作るものや、「支蔓」とのみ言うものもある。『語類』での用例は次の通り。

「學者觀書、且就本文上看取正意。不須立說別生枝蔓。唯能認得聖人句中之意、乃善。」〔論語一 語孟綱領〕一九・435

「讀書須是專一、不可支蔓。且如讀孟子、其間引接詩書甚多。今雖欲檢本文、但也只須看此一段、便依舊自看本來章句、庶幾此心純一。」〔訓門人三〕一一五・2776

「快活」は、すっきりする、理解の上で視界が廣がることをいう。『總論爲學之方』(八・13)に「學問須是大進一番、方始有益。若能於一處大處攻得破、見那許多零碎、只是這一箇道理、方是快活。然零碎底非是不當理會、但大處攻不破、縱零碎理會得些少、終不快活。」また、「論知行」(九・158)に「看理到快活田地、則前頭自磊落地去。」さらに「讀書法下」(一一・192)

にも「凡人讀書、若窮得到道理透處、心中也替他快活。」という用例が見える。

「紬繹」は、『漢書』谷永傳の「燕見紬繹、以求咎愆」に顏師古が「紬繹者、引其端緒也」と注するように、「糸口を引き出す」意で用いられるが、ここでは、「引っぱり出して反芻する」の意に近い。以下に引くのは「讀書法下」(一一・192)に見える同趣旨の用例である。「凡讀書、須有次序。且如一章三句、先理會上一句、待通透。次理會第二句、第三句、待分曉。然後將全章反覆紬繹玩味。」

「受用」は、「身につけて使いこなす」の意。『語類』の他所での用例は、「今只是要理會道理。若理會得二分、便有一分受用、理會得二分、便有二分受用。理會得一寸、便是一寸、一尺、便是一尺。漸漸理會去、便多。」〔論知行〕九・158 など。

「依希」「依希」は次の「略綽」と同様、「いい加減にすませ」の意。『總論爲學之方』(八・13)に「今人口略依希說過、不曾心曉。」という用例が見えるが、これとまったく同じ文が「論知行」(九・157)にも見える。

「略綽」は、「いい加減、おおざっぱ」の意。用例は、「前輩諸賢、多只是略綽、見得箇道理便休、少有苦心理會者。須是專心致意、一切從原頭理會過。」〔訓門人一〕一一三・2774 など。「意味長」は、「味わいが深まる」の意。『語類』において「意味」は、「訓門人三」(一一四・2770)の「伊川曰、予年十七八時、已曉文義、讀之愈久、但覺意味深長。」や、「訓門人四」(一

一六・2933)の「人之爲學、只是爭箇肯不肯耳。他若無得、不肯向這邊、略亦不解致思。他若肯向此一邊、自然有味、愈詳愈有意味。」また、「訓門人八」(一二〇・2965)の「打坐時意味也好。」からもわかるように、「含意・味わい」に近いニュアンスをもつ。

50 大凡讀書、須是熟讀。熟讀了、自精熟、精熟後、理自見得。如喫果子一般、劈頭方咬開、未見滋味、便喫了。須是細嚼教爛、則滋味自出、方始識得這箇是甜是苦是甘是辛、始爲知味。又云、園夫灌園、善灌之夫、隨其蔬果、株株而灌之。少間灌溉既足、則泥水相和、而物得其潤、自然生長。不善灌者、忙急而治之、擔一擔之水、澆滿園之蔬。人見其治園矣、而物未嘗沾足也。又云、讀書之道、用力愈多、收功愈遠。先難而後獲、先事而後得、皆是此理。又云、讀書之法、須是用工去看。先一書費許多工夫、後則無許多矣。始初一書費十分工夫、後一書費八九分、後則費六七分、又後則費四五分矣。卓。

「およそ讀書は、熟讀を旨とすべきだ。熟讀すればおのずと精通し、精通した後、理^{ことわ}は自然とわかる。たとえば、

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

果物を食べるのと同じで、いきなり噛みちぎっただけでは、うま味はわからないまま食べてしまうだけだ。細かくかみ砕き十分に咀嚼すればうま味がおのずと出てきて、甘いのか苦いのか、うまいのか澁いのがわかり、それでこそ味を知ったと言えるのだ。」またおっしゃった。「農夫が畑に水をやるのに、水やりの上手な農夫は作物に合わせて一株ごとに水をやるものだ。やがて水が十分にいきわたれば泥と水とがほどよくあわさり、作物は潤いを得て自然と生長する。下手な者は急いで済ませてしまおうとして、一擔ぎの水で畑全體の作物に水をやろうとする。人目には畑仕事のように見えても、作物はちっとも潤っていないのだ。」またおっしゃった。「讀書の道は、努力すればするほど、結果があらわれるのは先のことになる。『難きを先にして獲るを後にす』、『事を先にして得るを後にす』というのは、みなこの理屈だ。」また言われた。「讀書の法は、努力して讀むことだ。まず一冊の書物に多くの努力をほらえば、後はそれほど努力しなくてもよくなる。初めの一冊に十の努力をほらえば、次は八、九、その次は六、七、その次は四

か五の努力で足りるのだ。」「黃卓」

(校勘) 朝鮮古寫本 是甜是苦↓是甜 忙急而治之↓忙急而治之物未嘗沾足也↓物未嘗沾足也 無許多工夫矣↓無許多工夫費八九分↓費八九分工夫

朝鮮古活字本 灌溉既足↓灌溉既足

朝鮮刊本 隨其蔬果↓隨其蔬果

(注) 本條は、學問の進め方をまず飲食に、次いで農作業に譬えて論ず。飲食を譬えに持ち出す例は、『語類』では頻繁に見られるが、本條と同じく、「慌ててかぶりつかずにゆっくり咀嚼する」という譬えを幾つか引いておこう。

「若不見得入頭處、緊也不可、慢也不得。……如喫果子相似、未識滋味時、喫也得、不消喫也得。到識滋味了、要住、自住不得。」「(總論爲學之方) 八・133)

「若只是握得一箇鶻窠底果子、不知裏面是酸、是鹹、是苦、是澁。須是與他嚼破、便見滋味。」「(總論爲學之方) 八・134)

「或問大學。曰、大概是如此。只是更要熟讀、熟時、滋味自別。且如喫果子、生時將來喫、也是喫這果子、熟時將來喫、也是喫這果子、只是滋味別。」「(大學一綱領) 一四・264)

「大抵讀書須求其要處、如人食肉、畢竟肉中滋味、有人却要於骨頭上咀嚼、縱得些肉、亦能得多少。古人所謂味道之腴、最有理。可學因問、凡書傳中如此者、皆可且置之。曰、固當然。」「(尚書一湯誓) 七九・2036)

續く、學問を農作業、特に水やりに擬する例と同様の譬喩と

しては、「訓門人五」(一一七・283)に、次のように見える。

「譬如耕田、須是下了種子、便去耘鋤灌溉、然後到那熟處。而今只想象那熟處、却不曾下得種子、如何會熟。」一方、『朱子讀書法』卷一「循序漸進」でも、「讀書如園夫灌園、善灌者、隨其蔬果根株而灌之。灌溉既足、則泥水相和而物得其潤、自然生長。不善灌者、忙而治之、擔一擔之水、澆滿園之蔬、人見其治園矣、而物未嘗沾足也。」というふうに、同じ言が記録される。

「先難而後獲」は、『論語』「雍也第六」の、「樊遲問知、子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣。問仁、曰、仁者先難而後獲、可謂仁矣。」という言を指す。

「先事而後得」も、『論語』「顔淵一二」の「樊遲從遊於舞雩之下。曰、敢問崇德修慝辨惑。子曰、善哉問。先事後得、非崇德與。」集注では、そこに「先事後得、猶言先難後獲也。爲所當爲、而不計其功、則得日積而不自知矣。」と注しているのだが、これは、本條と同じ朱子の考えを表明したものである。

後半の、初めに大きな努力を拂えば、あとになるほど少しの努力でよい、という主張と同趣旨のものとして、前出の飲食の比喩に關する箇所で行いた「大學一綱領」(一四・264)の條の直後に「凡讀書、初一項須著十分工夫了、第二項只費得九分工夫、第三項便只費六七分工夫。少刻讀漸多、自貫通他書、自不著得多工夫。」とあるのが、參考になろう。

51 因説「進德居業」「進」字・「居」字曰、今看文字未熟、

所以鵲突、都只見成一片黑泔泔地。須是只管看來看去、認來認去。今日看了、明日又看、早上看了、晚間又看、飯前看了、飯後又看。久之、自見得開、一箇字都有一箇大縫罅。今常說見得、又豈是懸空見得。亦只是玩味之久、自見得。文字只是舊時文字、只是見得開、如織錦上用青絲、用紅絲、用白絲。若見不得、只是一片皂布。賀孫。

「進德居業」の「進」の字、「居」の字を説明するついでにおっしゃった。「まだ文章がよく読み込めていないから、曖昧模糊として、すべてが眞つ黒の塊に見えてしまう。とにかく何度でも繰り返し読んで確かめねばならない。きょう讀めば明日も讀み、朝讀めば夜にも讀み、食前に讀めば食後にも讀むのだ。しばらくするとおのずから見通しがついて、どの文字にも大きな切り込み口のあることがわかるだろう。わかったといつも言っているのは、勝手にそう思っているのじゃあるまいか。長い時間をかけて味わいさえすれば自然とわかってくる。文はもとのままでも、見通しさえつけば、錦に青糸・赤糸・白糸を使っているのが區別できるように、きちんと見えてくる。見通しがつかないうち

は、一枚の黒布と同然だ。」〔葉賀孫〕

（校勘）朝鮮古寫本 缺

（注）「進德修業」は、『易』「乾九三」の文言傳の、「君子終日乾乾、夕惕若、厲无咎。何謂也。子曰、君子進德修業、忠信所以進德也。修辞立其誠、所以居業也。」を指す。この文については、『語類』の「易」を論ずる箇所でも繰り返し議論されるが、本條の趣旨に合致するものとしては、「易五 乾下」（六九・1714）の「林安卿問修業居業之別。曰、二者只是一意。居、守也。逐日修作是修、常常如是是守。」や同じく「一箇是進、一箇是居。進、如日知其所亡、只管進前去。居、如月無忘其所能、只管日日恁地做。」（六九・1719）が挙げられよう。

「黑泔泔」は、眞つ黒ののっぺりした状態を形容する語。「大學二 經下」（一五・286）に、「公依舊是要安排、而今只就事物上格去。……若須待它自然發了、方理會它、一年都能理會得多少。聖賢不是教人去黑泔泔裏守著。」と見える。

「鵲突」は、現代語の「胡塗」に同じ。「性理一 人物之性急質之性」（四・86）の「且以一日言之、或陰或晴、或風或雨、或寒或熱、或清爽、或鵲突。」や、「總論爲學之方」（八・113）の「學者須是直前做去、莫起計獲之心。如今說底、恰似畫卦影一般。吉凶未應時、一場鵲突、知他是如何。到應後、方始知元來是如此。」からも明らかのように、ぼんやりしていることを言う。

「舊時」は、「以前の、もとの」の意。「理氣下 天地下」（二・

15)の「自是日月衰得不在舊時處了。」という例がわかりやすい。「縫罅」については、前稿の第13、14、15條を参照されたい。

52 讀書須是專一。讀這一句、且理會這一句。讀這一章、且理會這一章。須是見得此一章徹了、方可看別章、未要思量別章別句。只是平心定氣在這邊看、亦不可用心思索太過、少間却損了精神。前輩云、讀書不可不敬。敬便精專、不走這心。

讀書は集中することが大切だ。一句を読むなら、その一句に取り組む。一章を読むなら、その一章に取り組む。その一章がわかってから、他の章をみればよいのであり、別の章のことをあれこれ考えてはいけない。ともかく心靜かにその箇所を読むことが大切で、とやかく考えすぎてはいけない。それでは、すぐに挫けてしまう。先達は、「讀書は敬しまざるべからず」と言われたが、敬しめば、氣持ちが集中して心がふらつかなくなる。「記錄者名を缺く」

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「專一」は、集中すること。『語類』の特に讀書法を論ずる箇所には頻出する語であるが、本條と同趣旨の文脈での用例

としては、第49條でも引いた「訓門人三」(一一五・2776)の「又曰、讀書須是專一、不可支蔓。且如讀孟子、其間引援詩書處甚多。今雖欲檢本文、但也只須看此一段、便依舊自看本來章句、庶幾此心純一。」が挙げられる。

「敬」は、心を集中させてその状態を保つ精神のありかたを言う。これは、「所謂敬者、主一之謂敬。」(『河南程子遺書』一五)のように、そもそも程子が主張した概念で、『語類』でもそれは緊密に引き繼がれる。「敬」字と程伊川の思想については、「持守」(一一・207)に繰り返し論じられているが、「敬」の内包する意味の理解を助けてくれるので、ここに引いておく。

「程先生所以有功於後學者、最是敬之一字有力。」(210)

「敬字工夫、乃聖門第一義、徹頭徹尾、不可頃刻間斷。」(210)

「爲學有大要。若論看文字、則逐句看將去。若論爲學、則自有箇大要。所以程子推出一箇敬字與學者說、要且將箇敬字收斂箇身心、放在模匣子裏面、不走作了、然後逐事逐物看道理。」(208)

と、學問における「敬」の重要性を言ひ、

「只敬、則心便一。」(210)

「問敬。曰、不用解說、只整齊嚴肅便是。」(211)

などは、いずれも精神を一つに收斂させることを主張している。

一方『朱子讀書法』で、この條は數箇所に分散して記錄される。卷一「循序漸進」には、「讀書須是專一、讀這一句、且理會這一句。讀這一章、且理會這一章。須是見得此一章徹了、方

可看別章、未要思量別章別句。只是平心定氣在這裏看。」卷二「虛心涵泳」には、「只是平心定氣在這裏看、亦不可用心思索太過、少間卻便損了精神。」さらに、卷二「居敬持志」には、「前輩云、讀書不可不敬、敬便精專、不走了這心。」とみえる。

53 其始也、自謂百事能、其終也、一事不能。言人讀書不專一、而貪多廣闊之弊。側。

始めは、何でもできる、と自分で思うのだが、結局は、一つもできない。「集中して讀書できないのに、欲張ってたくさん読むことの弊害をおっしゃって。」〔沈憫〕

（校勘） 朝鮮古寫本 缺

54 泛觀博取、不若熟讀而精思。道夫。

手廣大に読むのは、熟讀してじっくり考えるのに及ばない。〔楊道夫〕

（注）「熟讀精思」は、『朱子讀書法』の章名にもなっている、讀書法を論じる際の朱子の基本語のひとつ。

55 大抵觀書先須熟讀、使其言皆若出於吾之口、繼以精思、使其意皆若出於吾之心、然後可以有得爾。然熟讀精思既曉

朱子語類讀書法篇譯注（一）（興膳・木津・齋藤）

得後、又須疑不止如此、庶幾有進。若以爲止如此矣、則終不復有進也。

そもそも書物を読むには、まず熟讀して、そのことばが自分の口から出たものようになるまでにせよ。それからじっくり考えて、その意がすべて自分の心から出たものようにするのだ。こうしてこそものにできる。熟讀しじっくり考えて理解できた後に、これだけではないはずだが、という疑問が生まれて来れば、まず進歩といえる。こんなところだろう、と思ってしまうえば、決してそれ以上の進歩はない。〔記録者名を缺く〕

（校勘） 朝鮮古寫本 缺

（注）本條からわかるように、讀書を進めて、疑問のなかったところに疑問を見出すまでになることを、朱子は學習課程の重要な一段階に据えている。「讀書法下」（一一・189）には、「讀書無疑者、須教有疑。有疑者、却要無疑、到這裏方是長進。」という風に、さらに問題をしばらくこんだ發言が見える。

56 書須熟讀。所謂書、只是一般。然讀十遍時、與讀一遍時終別。讀百遍時、與讀十遍又自不同也。履孫。

書物は熟讀せねばならない。書物自體は同じでも、十回讀めば一度讀んだ時とはやはり違うし、百回讀めば、十回讀んだときはまたおのずと違ってくるのである。〔潘履孫〕

（注）「一般」は、「一樣」に同じ。

57 爲人自是爲人、讀書自是讀書。凡人若讀十遍不會、則讀二十遍。又不會、則讀三十遍至五十遍、必有見到處。五十遍瞑然不曉、便是氣質不好。今人未嘗讀得十遍、便道不可曉。力行。

人の資質は資質、讀書は讀書である。ふつう、十回讀んでわからなければ、二十回讀み、なおわからなければ三十回、五十回と讀めば、きつとわかるところがある。五十回讀んでもさっぱりわからなければ、それは本質がだめなのだ。近頃では、十回も讀まないうちに、すぐにわからないとぬかしおる。〔王力行〕

（校勘）朝鮮古寫本 必有見到處↓必有見處 五十遍瞑然不曉↓到五十遍瞑然不曉

（注）「爲人」は「人となり、人柄」の意であるが、ここでは、

學問をする上での「資質」というほどの意味で用いられる。

「瞑然」は、眞つ暗なこと、轉じてさっぱり理解できないこと。「氣質」、これも資質と解しうる語であるが、「氣」という語を含むことからわかるように、さらに本源的、先天的なものを指す。「中庸三 第二十章」（六四・二三）の「誠は天理之實然、更無纖毫作爲。聖人之生、其稟受渾然、氣質清明純粹、全是此理、更不待修爲、而自然與天爲一。」からも、それが窺える。

『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」には、「凡人讀書、若讀十遍不會、則又讀二十遍。又不會、則讀三十遍至五十遍、必有見處。到五十遍、瞑然不曉、便是氣質不好。今人未嘗讀得十遍、便道不可曉。」とあり、朝鮮古寫本と同じ文面となっている。

（記錄者）王力行 字は近思。泉州同安縣の人。『師事年攷』には未掲載。本件は陳榮捷『朱子門人』の考證によった。

58 李敬子說先生教人讀書云、既識得了、須更讀百十遍、使與自家相乳入、便說得也響。今學者本文尙且未熟、如何會有益。方子。

李敬子は、先生が讀書のあり方を次のように説かれたと語った。「文章を理解したら、さらに何十回、何百回と繰り返し讀んで、自分自身でしっくりするようになれば、口

に出してもよく響く。今どきの學問をする者は、本文もろくに呑み込めていない。これでは役に立つものもないものだ。」

『李万子』

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 李敬子は李燾のこと。南康軍建昌縣の人。『師事年攷』の考證(313)によれば、朱子から大きな期待を寄せられた高弟の一人であったが、その名が『語類』に見えるのはこの條を含めて二例のみ、という。

「乳入」は、「程子之書」(九五・3458)に「如與東坡們說話、固是他們不是、然終是伊川說話有不相乳入處。」という用例が見える。この語は『語類』以外には用例の見出しにくい語なのであるが、文脈からは明らかに、「融和する。ぴったり調和する」というような意味で用いられている。

「説得響」は、「話がよく通る、響く」「人に耳を傾けさせる」の意。次に挙げるのは、陸象山の、説得力ある話ぶりを評する言で、やはり「説得響」が用いられている。なお、この部分の直前には、右に引いた「乳入」の用例がある。

「近世所見會說話、説得響、令人感動者、無如陸子靜。」(程子之書) 九五・3458)

59 讀書不可記數、數足則止矣。壽昌。

讀書では、回數を數えてはいけない。數が足りればおし

朱子語類讀書法篇譯注 (一) (興膳・木津・齋藤)

まいになるからだ。『吳壽昌』

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」に、「讀書不可記數、數足則止矣。」とある。

(記錄者) 吳壽昌 字は大年。邵武軍邵武縣の人。『師事年攷』には未掲載。やはり『朱子門人』の考證による。

60 誦數以貫之。古人讀書、亦必是記遍數、所以貫通也。

又曰、凡讀書、且從一條正路直去。四面雖有好看處、不妨一看、然非是要緊。佐。

「誦數して以て之を貫く」とあるように、古人も讀書に際しては、何度も數えてやったので、習熟できたのだ。」また言われた、「凡そ讀書するには、正道をまっすぐ進むこと。周圍に面白そうな所が有って、ちょっとと見てみるのはよいとしても、それは本筋ではない。」(蕭佐)

(校勘) 朝鮮古寫本 所以貫通也↓所以貫通 佐↓方子 「又曰」以下は、李万子の記録として獨立して條を起こされる。それに差し替わって、双行注の形で、「以下論古人讀書有遍數」と續く。

(注) 「誦數」は次の61條でも述べられるように、「故誦數

以貫之、思索以通之、爲其人以處之、徐其害者、以持養之」という『荀子』勸學篇中のことば。繰り返し口に出して讀むこと後に、記憶暗誦する意にも用いられるようになった。

『朱子讀書法』卷一「綱領」に、「程正思曰、讀書必正心肅容、計通數熟讀、通數已足而未成誦、必欲成誦。遍數未足、雖已成誦、必滿遍數。一書已熟、方讀一書。毋務泛觀、毋務強記。非聖之言勿讀、無益之文勿觀。先生嘉其言。」とある。

また、「訓門人九」(二二・2917)には、「讀書須是成誦、方精熟。」といい、また横渠の「讀書須是成誦」という言などを引いて、聲に出してそらんずるまで學ぶやり方を奨励している。(記錄者) 輔廣 字は漢卿、潜庵とも號す。嘉興府崇德縣の人。

『師事年攷』209

61 溫公答一學者書、說爲學之法、舉荀子四句云、「誦數以貫之、思索以通之、爲其人以處之、除其害以持養之。」

荀子此說亦好。誦數云者、想是古人誦書亦記遍數。貫字訓熟、如習貫如自然。又訓通、誦得熟、方能通曉。若誦不熟、亦無可得思索。廣。

司馬溫公がある學徒に答えた手紙には、學問の方法を説くに、『荀子』の四句を擧げている。「誦數して以て之を貫き、思索して以て之に通じ、その人を選びて以て之と處り、

その害を除きて以てこれを持養す」。荀子のこの説もなかなか良い。「誦數」というからには、古人が書物を暗誦する時には何度も數えてやったということだろう。「貫」の字は、たとえば「習貫すること自然の如し」のように「熟」と訓じたり、「通」と訓じたりする。熟するまで暗誦してこそ、通曉できるので。熟するまで暗誦しなければ、思索するなど不可能だ。〔輔廣〕

(校勘) 朝鮮古寫本 溫公↓司馬溫公

(注) 「溫公曰」は、司馬光の次のことばを指す。

「孟子謂曹交曰、夫道若大路然、豈難知哉。人病不求耳、子歸而求之、有餘師。荀子曰、學者誦數以貫之、思索以通之、爲其人以處之、除其害以養之。足下儻察二子之言、則雖閉門求之道烏有不至者哉。光何人也、足下推褒之過、而督責之重、譬之若指江河、而使孺子涉焉、必不敢從已。不宣。光恐悚頓首。」

〔答明端太祝書〕『溫國文正公文集』卷五九

引用の『荀子』の言は、前條に引いたとおり。その「誦數」に關して俞樾は、「誦數、猶誦說也、禮記儒行篇、……正義曰、數、說也。」と言う。この俞樾の注からもわかるように、「數」は「說」と理解されるものだが、本條での朱子の發言から、「數」という字を含む「誦數」が「繰り返して讀む」の意であるからには、そもそも古人は數えながら書を読んだ、と彼が考えてい

たらしいことが窺える。これについては、「訓門人四」(一一六・3806)に、「又曰、荀子云、誦數以貫之、思索以通之。誦數、即今人讀書記偏數也、古人讀書亦如此。只是荀卿做得那文字不帖律處也多。」とあることから明らかであろう。もっとも、朱子の引用の趣旨は、「何度も反覆して讀んでそれに習熟し、思索してそれに通曉し、人格でそれに對處し、害を除いてそれを持養す」ということになり、必ずしも『荀子』原文に忠實とは言えない斷章取義である。譯文での訓讀は、岩波文庫の金谷治氏のものによった。

「習貫如自然」は、『孔子家語』七十二弟子解「孔子曰、然少成則若性也、習慣若自然也。」や、『漢書』賈誼傳「孔子曰、少成若天性、習貫如自然。」(注)師古曰、貫亦習也。」に見えることば。ここでは貫は習と訓ぜられているが、貫を通とも訓ずる例は、『淮南子』時則の「貫大人之國」に「貫、通也」と注し、また『史記』樂書の「禮樂之說貫乎人情矣」の正義に「貫、猶通也」とみえることなどが挙げられる。

この條と關連する『朱子讀書法』の記錄としては、卷一「綱領」に「司馬溫公說爲學之法、舉荀子四句云、誦數以貫之、思索以通之、爲其人處之、除其害以持養之。」また、卷一「熟讀精思」には、「又曰、荀子說誦數以貫之、見得古人誦書、亦記遍數、貫字訓熟、如習貫如自然、又訓通、誦得熟、方能得通曉、若不熟、亦無可思索熟讀下同。凡讀書、且要熟讀、不可只管思、口中讀則心中閑、而義理自出。某之始學、亦如是爾、更無別法。

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

又曰、讀得通貫後、義理自出。」とあるのが、參考になる。

62 山谷與李幾仲帖云、不審諸經・諸史、何者最熟。大率學者喜博、而常病不精。汎濫百書、不若精於一也。有餘力、然後及諸書、則涉獵諸篇亦得其精。蓋以我觀書、則處處得益。以書博我、則釋卷而茫然。先生深喜之、以爲有補於學者。若海。

黃山谷が李幾仲に與えた書簡に次のようにある。「君は、諸經や諸史の、何に最も習熟しているのかしら。だいたい學問する者は博學をもてはやす一方で、精密でないという缺點がいつもある。百の書物を手當たり次第に讀むのは、一冊の書を精讀するのに及ばない。餘力ができて、そのあとで諸書に手をつければ、諸篇を涉獵してもその精華を我がものにすることが出来る。自分を主體にして書物を讀めば、至るところが身につくが、書物を主體にして自分を博めようとすると、書物を手放した後には何も残らなくなる。」先生はとてものことばを氣に入られて、學問する者のためになる、とされた。〔楊若海〕

(注) 「與李幾仲帖」の出典は不明。黃山谷の「答李幾仲書」という書簡は『豫章黃先生文集』卷十九に見えるが、そこでは學問を論じはするものの、本條に引くようなことばは見えない。幾仲とは李大方の字。またの字を臨集という。

なお、本條と重なる言が、『朱子讀書法』卷一「循序漸進」に見え、そこでは63條と本條を一つにまとめた形になっている。少し長くなるが、本讀書法篇と『朱子讀書法』との關係を知る手がかりとなると思われるので以下に引用する。「凡讀一件、要精這一件、一件看得精、其他書亦易看。嘗愛山谷與李幾仲帖說讀書法甚好、云、大率學者喜博、而管病不精。泛濫諸書、不若精於一也。有餘力、然後及諸書、則涉獵諸篇、亦得其精。蓋以我觀書、則處處得益。以書博我、則釋卷而茫然。」

(記錄者) 楊若海 楊道夫(『師事年放』123)の子か。本人は『師事年放』に未掲載。ここでは『朱子門人』の考證によった。

63 讀書、理會一件、便要精這一件、看得不精、其他文字便亦都草草看了。一件看得精、其他亦易看。山谷帖說讀書法甚好。淳。

書物を讀んで、何か一つのことごとに取組む際には、それを精密に究めねばならない。精密に讀まなければ、他の文章もまたいい加減に讀むことになってしまふ。一つが

精密に讀み込めれば、その他のものもまた讀みやすくなる。

山谷の書簡は讀書の方法をうまく語っている。〔陳淳〕

(校勘) 朝鮮古寫本 看得不精↓這一件看得不精
草草看了。一件↓草草看了。若此一件

(注) 山谷の書簡は前條に既出のものを指す。

64 學者貪做工夫、便看得義理不精。讀書須是子細、逐句逐字要見着落。若用工粗鹵、不務精思、只道無可疑處。非無可疑、理會未到、不知有疑處。大抵爲學老少不同、年少精力有餘、須用無書不讀、無不究竟其義。若年齒向晚、却須擇要用功、讀一書、便覺後來難得工夫再去理會、須沈潛玩索、究極至處、可也。蓋天下義理只有一箇是與非而已。

是便是是、非便是非。既有着落、雖不再讀、自然道理浹洽、省記不忘。譬如飲食、從容咀嚼、其味必長。大嚼大咽、終不知味也。謨。

學問する者が欲張ってがむしゃらにやれば、義理を精密に讀みとれなくなる。讀書は綿密に、句ごと、字ごとに落ちつくところを見究めねばならない。努力がいい加減でじつくり考えようとしなければ、何も疑わしい所はない、と

思ってしまう。疑わしい箇所がないのではなく、取り組み方が不十分だと、疑わしいところの存在に気づかないのだ。だいたい、學問をするにも年齢によって違いがある。若いうちは精力に餘裕があるから、どんな本でも讀むぞ、とこゝん義を究めるぞ、という心がけで臨むべきである。しかし齡を取っていけば、要所をしばって努力すべきである。

一冊の書を読むにも、その後もう一度取り組む時間はなかなか得難いだろうから、深く味わい思いを巡らし、徹底的に究めるのがよい。天下の義理にはただ一つの是と非があるだけだ。是は是、非は非なのだ。落ちつくところが見つかれば、さらに讀まずとも、おのずから道理がしみわたリ、しつかり憶えて忘れられなくなるものである。例えば、飲み食いする時に、ゆっくりと噛み碎けば、きつと味わいは深くなるが、ががつすれば、決して味などわからないようなものだ。〔周註〕

（校勘）朝鮮古寫本 要見着落↓要見去着 一箇↓一個
朝鮮古活字本・刊本 要見着落↓要見去著

（注）「着落」は、「落ちつくところ」の意。「著落」とも書く。朱子は、道理にはおのずから落ちつくところがあり、それを見

朱子語類讀書法篇譯注（一）（興膳・木津・齋藤）

つけることを重視する。『語類』でのこの語の用例は数多いが、本條と同じ文脈での用例は、「總論爲學之方」（二・130）の「學者工夫、但患不得其要。若是尋究得這箇道理、自然頭頭有箇着落、貫通浹洽、各有條理。」や、「讀書法下」（一・177）の「讀書須將心貼在書冊上、逐句逐字、各有着落、方始好商量。大凡學者須是收拾此心、令專靜純一、日用動靜間都無馳走散亂、方始看得文字精審。如此、方是有本領。」また、それとほとんど同じ文句の、「訓門人八」（二・290）の「讀書須將心貼在書冊上、逐字看得各有着落、方好商量。須是收拾此心、令專靜純一、日用動靜間都在、不馳走散亂、方看得文字精審。如此、方是有本領」を擧げることができる。

「可疑處」は、第55條でも述べたように、學問では、疑問を感じるようになる段階を経ねば進歩しない、という朱子の考えに基づいた主張。「某向時與朋友說讀書、也教他去思索、求所疑。近方見得、讀書只是且恁地虛心就上面熟讀、久之自有所得、亦自有疑處。」（「讀書法下」一一・186）や、55條でも引いた「讀書無疑者、須教有疑。有疑者、却要無疑、到這裏方是長進。」（「讀書法下」一一・186）に端的に表明される。

學問の方法は、年齢によって異なる、という主張も、『語類』の中ではしばしば見られるもの。ここでは、讀書法上第99條の次のことばを引いておこう。「中年以後之人、讀書不要多、只少少玩索、自見道理。」（「讀書法上」一〇・175）
「玩索」は、じっくり味わうこと。「玩索・窮究、不可一廢。」

〔讀書法〕 一一・183

「咀嚼」「草草」は、讀書の態度の上で、價値の對立する概念を代表する。「歸去各做工夫、他時相見、却好商量也。某所解語孟和訓詁注在下面、要人精粗本末、字字爲咀嚼過。此書、某自三十歲便下工夫、到而今改猶未了。不是草草看者、且歸子細。」〔訓門人四〕一一六・2796)でも、兩者が對比して述べられる。

「粗鹵」は、おおざっぱで雑な態度をいう。「要做大功名底人、越要謹密、未聞粗魯濶略而能有成者。」〔歷代二〕一三五・3230)

本條も50條と同趣旨の飲食を譬えに用いている。50條の注を参照されたい。

(記錄者) 周謨(一一四一～一二〇一) 字は舜弼。南康軍建昌縣の人。『師事年攷』166

65 書只貴讀、讀多自然曉。今卽思量得、寫在紙上底、也不濟事、終非我有、只貴乎讀。這箇不知如何、自然心與氣合、舒暢發越、自是記得牢。縱饒熟看過、心裏思量過、也不如讀。讀來讀去、少間曉不得底、自然曉得、已曉得者、越有滋味。若是讀不熟、都沒這般滋味。而今未說讀得注、且只熟讀正經、行住坐臥、心常在此、自然曉得。嘗思之、

讀便是學。夫子說、「學而不思則罔、思而不學則殆、」學便是讀。讀了又思、思了又讀、自然有意。若讀而不思、又不知其意味。思而不讀、縱使曉得、終是脆艱不安。一似倩得人來守屋相似、不是自家人、終不屬自家使喚。若讀得熟、而又思得精、自然心與理一、永遠不忘。某舊苦記文字不得、後來只是讀。今之記得者、皆讀之功也。老蘇只取孟子・論語・韓子與諸聖人之書、安坐而讀之者七八年、後來做出許多文字如此好。他資質固不可及、然亦須着如此讀。只是他讀時、便只要模寫他言語、做文章。若移此心與這樣資質去講究義理、那裏得來。是知書只貴熟讀、別無方法。倂。

書物は、ともかく讀むことが大切で、何度も讀めばおのずからわかつてくる。單に思いめぐらすだけでは、紙に書いてあることは、何の役にも立たず、決して自分のものにはならない。ともかく讀むことが大事だ。どうしてかはわからないが、自然と心が氣と溶け合って、のびのびと活發になり、おのずからしっかり憶えられる。たとえじっくり書物に目を通し、心の中で思いを巡らしても、口に出して讀むのには及ばない。繰り返し讀んで、しばらくすれば、

わからなかったこともおのずからわかってくるし、すでにわかったことは、いっそう味わいが増してくる。じっくり讀まなければ、決してそのような味わいは得られない。注を讀むことはしばらく措くとして、まずはじっくり經の本文を讀むのだ。一日中寝ても醒めても、心がそこであれば、おのずからわかってくる。いつも思うのだが、讀むとはつまり學ぶことだ。夫子は「學びて思わざれば則ち罔し、思いて學ばざれば則ち殆し」と言われたが、學ぶとはつまり讀むことだ。讀んでは思い、思つてはまた讀んでいけば、おのずから面白みが出てくる。もしも讀むだけで思わなければ、その味はわからないし、思いはしても讀まなければ、たとえわかったとしても、結局はぐらぐらと不安定なものでしかない。ちょうど人に家の番をしてもらうようなもので、身内でないければ、結局は身内のように使うわけにはいかない。じっくり讀み込んだ上に思いも精密であれば、おのずから心が理と一つになって、決して忘れはしないのである。わたしは昔文章が憶えられないことに悩んだものだが、後でひたすら讀むことに徹した。今でも憶えているの

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

は、ひとえに讀んだおかげである。老蘇(蘇洵)は、『孟子』・『論語』・韓愈や諸聖人の著作だけを、腰を落ちつけて七八年讀み、後に書いた多くの文章はかくもすばらしい。彼の資質はもとより及ぶべくもないが、やはりこのように讀まないといけない。ただ彼が讀んでいた時には、もっぱら他人のことを真似て文章を作ろうとしていた。もしも、その心と資質を義理を講究する方に振り向けていたら、すばらしかったのに。ここからも、書物は熟讀することが肝要で、他に方法はないことがわかるのだ。〔沈側〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 卽↓只、脆脆↓脆脆

朝鮮刊本 卽↓只 那裏得來↓那裏得來

(注) 「讀」はこの章全體を通じて、61條での「誦」と同様の含意で用いられているが、譯の上では、煩雜を避け、單に「讀む」とのみすることがある。

「發越」は生き生きと動くことを言う。「語類」での用例は、「仁便有箇流動發越之意、然其用則慈柔。義便有箇商量從宜之義、然其用則決裂。」(性理三 仁義禮智等名義「六・12」)や、「近來學者、如潭泉人物、於道理上發得都淺、都是作文時、文采發越、晏然可觀。」(訓門人三「一一五・2283」)など。

「脆脆」は不安定な状態を形容する雙聲の語。「脆脆」も同じ。そもそものは、『易』困卦、「困于葛藟、于脆脆。」(注)行則繹繞、居不獲安。(疏)動搖不安之貌。」にみえる語。『語類』の中では、「大學一 經上」(一四・三)に、「問、靜而後能安。曰、安、只是無脆、脆之意。才不紛擾、便安。」とある。また、文字は「果兀」につくるものの、「論語六 爲政篇下(二四・三)」にも、「思與學字相對說。學這事、便思這事。人說這事合恁地做、自家不曾思量這道理是合如何、則罔然而已。罔、似今人說罔兩。既思得這事、若不去做這事、便不熟、則果兀不安。」とあるのも、同じ意味の用例として参考とならう。

「行住坐臥」は、佛教語で日常生活の基本動作を言い、これを「四威儀」と總稱する。「訓門人四」(一一六・286)に、「讀書者當將此身葬在此書中、行住坐臥、念念在此、誓以必曉徹爲期。」「守屋」は、「守舍」に同じ。家の番をすること。

読んでいる對象を常に心に保っておかねばならない、という主張は「論語一 語孟綱領」(一九・三)の、「論語一日只看一段、大故明白底、則看兩段。須是專一、自早至夜、雖不讀、亦當涵泳在胸次、如有一件事未了相似、到晚却把來商量。」など、隨所に見られる。

ここで引かれる蘇洵の故事は、「上歐陽內翰第一書」(「嘉祐集」卷十二)に蘇洵自ら次のように語るのに基づく。「由是盡燒曩時所爲文數百篇、取論語・孟子・韓子及其他聖人賢人之文、而兀然端坐終日以讀之者七八年。……時既久、胸中之言日益

多、不能自制、試出而書之、已而再三讀之、渾渾乎覺其來之易矣。」ところで、蘇洵を論評する言は『語類』に多く見られる。總じて朱子は、彼の學問の全體に對しては、大いに意見があったらしいことが窺える。しかしその一方で、彼の資質については、「易 九渙」(七三・186)に「老蘇天資高、又善爲文章」というふうに、本條と同様、相當の評價をしていることがわかる。そして、彼が「論語・孟子・韓子及其他聖人賢人之文」のみをひたすら讀んだ、という部分は、「論語一 語孟綱領」(一九・三)の、「聖人言語只熟讀玩味、道理自不難見。……如老蘇輩、只讀孟韓二子、使翻譯得許多文章出來。且如攻城、四面牢壯、若攻得一面破時、這城子已是自家底了、不待更攻得那三面、方入得去。初學固是要看大學論孟。若讀得大學一書透徹、其他書都不費力、觸處便見。」や、「訓門人九」(一一一・2918)の「嘗見老蘇說他讀書、孟子・論語・韓子及其他聖人之文、兀然端坐終日以讀書者七八年。方其始也、入其中而惓然。博觀於其外而駭然以驚、及其久也、讀之益精、而其胸中豁然以明、若人之言固當然者、猶未敢自出其言也。時既久、胸中之言日益多、不能自制、試出而書之、已而再三讀之、渾渾乎覺其來之易矣。」など、本條と同じく道理を追求する學徒を鼓舞する文脈においてしばしば引き合いに出される。

さて、朱子は各所で、文人が作文のためだけに大きな努力を拂うことを批判し、一方でそれを引き合いに出しつつ、理學の徒にはそれ以上の努力を求めているのだが、次に、蘇洵以外の

文人に關して同様の批判を行っている例をいくつか舉げておく。

「正如韓退之・老蘇作文章、本自沒要緊事。然他大段用功、少間方會漸漸掃去那許多鄙俗底言語、換了箇心胸、說這許多言語出來。」〔自論爲學工夫〕一〇四・2633

「問、東坡與韓公如何。曰、平正不及韓公。東坡說得高妙處、只是說佛、其他處又皆粗。又問、歐公如何。曰、淺。久之、又曰、大概皆以文人自立。平時讀書、只把做考究古今治亂興衰底事、要做文章、都不曾向身上做工夫、平日只是以吟詩飲酒戲謔度日。」〔本朝四 自熙寧至靖康用人〕一三〇・3113

「若く那裏得來」は事實に反することを假想するときの熟した句法。「もし〜であつたら、素晴らしかつたのに」。本條と同様、文人を引き合いに出して理學の徒の奮起を促す趣旨を述べる「自論爲學工夫」(一〇四・2633)の記錄に、この句法を用いた箇所が見られるので、少し長いが以下に引いておく。「而今人看文字、全然心粗。未論說道理、只是前輩一樣文士、亦是用幾多工夫、方做得成、他工夫更多。若以他這心力移在道理上、那裏得來。如韓文公答李翊一書與老蘇上歐陽公書、他直如此用工夫。未有苟然而成者。歐陽公則就作文上改換、只管揩磨、逐旋捱將去、久之、漸漸揩磨得光。老蘇則直是心中都透熟了、方出之於書。看他們工夫更難、可惜。若移之於此、大段可畏。看來前輩以至敏之才而做到鈍底工夫、今人以至鈍之才而欲爲至敏底工夫、涉獵看過、所以不及古人也。」これ以外には、以下のような用例がある。「太宗每日看太平廣記數卷、若能推此心

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

去講學、那裏得來。」〔本朝一 太宗眞宗朝〕一二七・3044
「神宗極聰明、於天下事無不通曉、眞不世出之主、只是頭頭做得不中節拍。如王介甫爲相、亦是不世出之資、只緣學術不正當、遂悞天下。使神宗得一眞儒而用之、那裏得來。此亦氣數使然。天地生此人、便有所偏了。可惜、可惜。」〔本朝一 神宗朝〕一二七・3046

本條に該當する言は、『朱子讀書法』では卷一「熟讀精思」に、「今人看文字、全心竊、前輩文士亦用幾多工夫、方做得成。若用之道理上、那裏得來。如韓文公答李翊一書與老蘇上歐陽書、直如此用工夫、未有苟然而成者。歐陽公則就作文上改換、只管揩磨、逐旋捱將去、久久漸漸揩磨得光。老蘇直是心中都透熟了、方出之書。看他所用工夫更難。前輩以至敏之才而做到鈍工夫、今人以至鈍之才而欲爲至敏之工夫、所以程子曰、參也竟以魯得之。精思下同」と記錄されている。

66 讀書之法、讀了一遍了、又思量一遍。思量一遍、又讀一遍。讀誦者、所以助其思量、常教此心在上面流轉。若只是口裏讀、心裏不思量、看如何也記不子細。又云、今緣文字印本多、人不着心讀。漢時諸儒以經相授者、只是暗誦、所以記得牢、故其所引書句、多有錯字。如孟子所引詩書亦多錯、以其無本、但記得耳。個。

「讀書のしかたは、讀んでは思いを運らせ、思いを運らせてはまた讀むことだ。口に出して讀むのは、思いを運らす助けになり、心が常にそこにあつてはたらくようにするのだ。もしも單に口先で讀むだけで、心で何も考えなかつたら、いくら目を通して子細に憶えることはできない。」また言われた。「いまは印刷した書物が多いので、人は心をこめて讀もうとしない。漢代の學者たちが經を傳授したのは、もっぱら暗誦にたよっていたので、しっかり憶えた。だから彼らの引く文句には、字の間違ひがよくある。『孟子』で引かれる『詩』や『書』のことばにも間違ひが多いのは、書物が無くて、記憶していたからに他ならない。」

〔沈例〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 「上面流轉。若只」以下が、前葉の頭に續く亂丁が見られる。今緣文字印本多し今緣文字印本多少。個

↓缺

〔注〕 漢代の學者が、口承で學問を傳えたことは、例えば、『漢書』儒林伏生傳の顔師古の注に、「衛宏定古文尚書序云、伏生老、不能正言、言不可曉也、使其女傳言教（朝錯。齊人語多與穎川異、錯所不知者凡十二三、略以其意屬讀而已。）」とあることなどから窺える。

『孟子』に『詩』『書』の引用が多いというのは、「訓門人三」（一・一五・2776）の「又曰、讀書須是專一、不可支蔓。且如讀孟子、其間引援詩書處甚多。今雖欲檢本文、但也只須看此一段、便依舊自看本來章句、庶幾此心純一。」などにもみえる言であるが、間違ひが多いという發言は、他所では見出せない。

67 今人所以讀書苟簡者、緣書皆有印本多了。如古人皆用竹簡、除非大段有力底人方做得。若一介之士、如何置。所以後漢吳恢欲殺青以寫漢書、其子吳祐諫曰、「此書若成、則載之車兩。昔馬援以薏苡興謗、王陽以衣囊微名」、正此謂也。如黃霸在獄中從夏侯勝受書、凡再踰冬而後傳。蓋古人無本、除非首尾熟背得方得。至於誦誦者、也是都背得、然後從師受學。如東坡作李氏山房藏書記、那時書猶自難得。晁以道嘗欲得公・穀傳、遍求無之、後得一本、方傳寫得。今人連寫也自厭煩了、所以讀書苟簡。銖。

近頃の人が讀書をおざなりにするのは、印刷された書物が多くなったからである。昔の人は竹簡を用いていたので、大變な有力者であつてはじめてものにできた。一介の讀書人が、どうしてそれをもてたろう。だから後漢の吳恢が竹

簡を作つて『漢書』を寫そうとした時、息子の吳祐が、「書物ができあがったら、車に載せねばなりません。昔馬援はハトムギのせいで誹謗され、王陽は衣装入れのせいで悪い噂を立てられました。」と諫めたのは、まさにこのことなのだ。黃覇が獄中で夏侯勝に『尚書』を授けたときにも、たっぷり二冬を越してやっと傳え終わった。なぜなら、昔の人は本を持たなかったので、初めから終いまですっかり憶える他はなかったのである。講義を受けるにも、やはりすべて暗記してしまつてから、師に學問を授かつた。たとえば、東坡の「李氏山房藏書記」を見れば、その當時でも書物は得難いものであつた。晁以道は『公羊傳』『穀梁傳』を手に入れたと思ひ、あちこち探し回つても見つけないとができず、後になつて一本を手に入れ、ようやく筆寫することができたのである。いまは、寫すことすら面倒がつて、それで讀書がおざなりになるのだ。『重録』

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 載之車兩↓載之兼兩

(注) 「苟簡」は、おざなりな態度をいう語。『語類』での用

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

例は、「訓門人四」(一一六・278b)に「問。承先生賜教讀書之法、如今看來、聖賢言行、本無相違。其間所以有可疑者、只是不逐處研究得通透、所以見得抵牾。若眞箇逐處逐節逐段見得精切、少間却自到貫通地位。曰、固是。如今若苟簡看過、只一處、便自未曾理會得了、却要別生疑義、徒勞無益。」と見える。本條で引かれる吳祐の故事は、『後漢書』吳祐傳に次のように見えるものに基づく。「恢欲殺青簡以寫經書、祐諫曰、……此書若成、則載之兼兩。昔馬援以薏苡與謗、王陽以衣囊微名、嫌疑之間、誠先賢所慎也。」

「殺青」は、竹の油分を抜いて竹簡を作る工程のこと。具體的な作業については、『風俗通義』佚文に「殺青書可繕寫。謹案、劉向別錄曰、殺青者、直治青竹作簡書之耳。新竹有汗、善朽蠹、凡作簡者、皆於火上炙乾之、陳・楚之間謂之汗、汗者、去其汗也。吳・越曰殺、殺亦治也。劉向爲孝成皇帝典校書籍、二十餘年、皆先書竹、爲易刊定、可繕寫者、以上素也。由是言之、殺青者竹、斯爲明矣。今東觀書、竹素也。」とあるのが、参考になる。

馬援の故事は、『後漢書』馬援傳に、「初、援在交趾、常餌薏苡實、用能輕身省慾、以勝瘴氣。南方薏苡實大、援欲以爲種、軍還、載之一車。時人以爲南土珍怪、權貴皆望之。援時方有寵、故莫以聞。及卒後、有上書譖之者、以爲前所載還、皆明珠文犀。馬武與於陵侯昱等皆以章言其狀、帝益怒。援妻孥惶懼、不敢以喪還舊塋、裁買城西數畝地瘞葬而已。賓客故人莫敢弔會。嚴

與援妻子草索相連、詣闕請罪。帝乃出松書以示之、方知所坐、上書訴寃、前後六上、辭甚哀切、然後得葬。」とあるのによる。

王陽の故事は、以下に引く『漢書』王吉傳に見える、「自吉(字子陽)至崇、世名清廉、然材器名稱稍不能及父、而祿位彌隆。皆好車馬衣服、其自奉養極爲鮮明、而亡金銀錦繡之物。及遷徙去處、所載不過糲衣、不畜積餘財。去位家居、亦布衣疏食。天下服其廉而怪其奢、故俗傳王陽能作黃金。」による。

黃霸の故事は、『漢書』循吏傳・黃霸傳に「知長信少府夏侯勝非議詔書大不敬、霸阿從不舉劾、皆下廷尉、繫獄當死。霸因從勝受尙書獄中、再陰冬、積三歲乃出。」と見えるのに基づく。

蘇軾「李氏山房藏書記」の該當箇所は、以下の通り。

「自秦漢以來、作者益衆、紙與字畫日趨於簡便、而書益多、士莫不有、然學者益以苟簡、何哉。余猶及見老儒先生、自言其少時、欲求史記・漢書而不可得、幸而得之、皆手自書、日夜誦讀、惟恐不及。近歲市人轉相摹刻諸子百家之書、日傳萬紙、學者之於書、多且易致如此、其文詞學術、當倍蓰於昔人。而後生科舉之士、皆束書不觀、遊談無根、此又何也。……使來者知昔之君子見書之難、而今之學者有書而不讀爲可惜也。」

「除非方」は、「只有方」におなじ。

「誦誦」は、儒者の授業のことである。その形態の一端は、『史記』儒林傳・董仲舒傳の「董仲舒、廣州人也。以治春秋、李景時爲博士、下帷誦誦、弟子傳以久相受業、或莫見其面。」

などからも窺える。

晁以道は晁説之の字。ただし、本條に引かれる故事の由來は未詳。

(記録者) 董銖(一一五二―一二二四) 字は叔重。饒州德興縣の人。『師事年攷』續322。

68 講論一篇書、須是理會得透。把這一篇書與自家發作一片、方是。去了本子、都在心中、皆說得去、方好。敬仲。

一篇の書物を講義するには、それに徹底的に取り組まねばならない。この一篇の書物を自己と一體のものに同化せねばならない。書物を離れても、すべてが心の中におさまリ、皆すらすら論じられるようになってこそ良いのだ。

〔游敬仲〕

(注) 「發作一片」は、「たたき上げて一つにする」ほどの意味であろう。まったく同じ用例は見つからなかったが、似たものとしては、「呂子約書來、爭莫見乎隱、莫顯乎微。只管發作一段看。某答它書、江西諸人將去看、頗以其說爲然。」(中庸第一章)六二・1604)がある。

(記録者) 游敬仲 字は連叔。南劍州劍浦縣の人。『師事年攷』209

69 莫說道見得了便休。而今看一千遍、見得又別。看一萬遍、看得又別。須是無這冊子時、許多節目次第都恁地歷歷落落、自家肚裏、方好。方子。

讀んでわかったらそれでおしまいなどと言ってはいかん。千回讀めば、(今までとは)別のことがわかってくるし、一萬回讀めば、また別のことが見えてくる。その書物が手許にないときでも、多くの要點や筋道が手に取るようになるにきりと自分の腹の中におさまっているようであってこそよい。[李方子]

(注) 「歷歷落落」は、「訓門人三」に、「爲學、須是裂破藩籬、痛底做去、所謂一杖一條痕、一掴一掌血。使之歷歷落落、分明開去、莫要含糊。」(一一五・2783)とあるように、一つづつ手に取るように明瞭であることを形容する。

「節目」は、「要點」の意。前稿第14條の注参照。

「莫說道」は、禁止のことば。

本條に該當する『朱子讀書法』の記録は、卷一「循序漸進」に「莫道見了便休、而今看一千遍、見得又別。看一萬遍、見得又別。須是無這冊子時、許多節目次第、都歷歷落落、在自家肚裏、方好。」と見えるのだが、實はこれはかなり長い條の一部分であり、構成としては、前出52條の前半部と「總論爲學之方」(八・

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

13)の、讀書を入浴に譬える「某適來、因澡浴得一說。……」という條とを一つにして挙げられる。また、52條は先に述べたとおり、卷一「循序漸進」に一部が引かれ、卷二「虚心涵泳」と卷二「居敬持志」に残りが分散して記録される。このことは、『語類』では、意味の上で多様なものが一つにまとめられ、時には寄せ集めのような外觀を呈する條もあることを考え合わせた時、朱子の弟子たちが讀書法を整理する上での方針や、その傳承のされかたを説明するためのヒントを提供してくれる。なお、『語類』編纂過程の考證は、東景南『朱熹佚文輯考』(江蘇古籍出版社、一九九一年)「朱熹語錄編集考」に詳しいが、残念ながらこの四庫本『朱子讀書法』には一切言及されていない。

70 放下書冊、都無書之意義在胸中。升卿。

書物を手放してしまつたら、その内容がさっぱり胸の中に残っていない。[升卿]

(校勘) 朝鮮古寫本 升卿↓外卿

(注) 本條は、學問をする上で一般的に陥りやすい缺點を指摘する。また、書物が目の前になければ考えないことへの批判は、讀書法上第21條にすでに見られるし、次の71條も同じである。

「放下」は、「手放す」の意。以下に挙げる「訓門人三」(一一五・2775)の「大凡人須是存得此心。此心既存、則雖不讀書、亦有一箇長進處。纔一放蕩、則放下書冊、便其中無一點學問氣

象。」も同じ。

「都」は、否定詞を強める副詞。

(記錄者) 升卿については未詳。

71 歐公言、作文有三處思量、枕上、路上、廁上。他只是做文字、尙如此、況求道乎。今人對着冊子時、便思量。冊子不在、心便不在。如此、濟得甚事。義剛。

歐陽公は、「文を作るには、思索にふさわしい場所が三つある。寢床、道、廁だ」と言った。彼は、文章を書くだけでなく、こんなに打ち込んだのだ。道理を探索するのなら、なおさらのこと。ところが人は、書物に向かっているときには考えるが、書物が目の前になければ、考えない。こんなことで何になろうか。〔黃義剛〕

(校勘) 朝鮮古寫本 今人對着↓而今人只對着

(注) 「歐公言」とは、歐陽修「歸田錄」に見える、著名な「余因謂希深曰、余平生所作文章、多在三上、乃馬上・枕上・廁上也。蓋惟此尤可以屬思爾。」という言のこと。

「濟得甚事」は、「濟事」の反語表現。前稿20條の「濟事」についての注を参照。このように、『語類』において「濟事」は否定か反語でしか用いられない。

この條は、65條の蘇洵の故事を引く部分と同じ趣旨で、文人の努力を評價しつつも、道理を探索する立場の人間は更に努力せねばならぬ、と述べる。歐陽修についての發言は、65條の注で既に引いてあるので、参照されたい。

『朱子讀書法』卷二「著緊用力」に、本條とはほぼ同じ言が記錄されるが、歐陽修の引用は、原文により近く「馬上」となっている。「歐公言、作文有三處好思量、枕上、馬上、廁上。他只是做文字、尙如此、況求道乎。而今人只對着冊子便思量、冊子不在、心便不在。如此、濟得甚事。」

72 今之學者、看了也似不曾看、不曾看也似看了。方子。

いまどきの學問する者は、讀んでいても讀んでないようだし、讀んでいなくても讀んでいるみたいだ。〔李方子〕

(注) 本條は、この前後數段で述べるような、自己の中に内在化していない中途半端な學問のありかたを戒める。

73 看文字、於理會得了處更能看過、尤妙。過。

文章を讀むときには、きちんと取り組んだ所をさらに讀みこむなら、ことによい。〔王過〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺
朝鮮古活字本 妙↓抄

(注) 「看過」は、「目を通す」「讀む」の意。

「而今只是那一般合看過底文字也未看、何況其他。」(『讀書法上』10・165)

(記錄者) 王過 字は幼觀。都陽縣の人。『師事年攷』340

74 看文字須子細。雖是舊曾看過、重溫亦須子細。每日可看三兩段。不是於那疑慮處看、正須於那無疑處看、蓋工夫都在那上也。廣。

文章を讀むには、綿密に讀むことだ。たとえ前に讀んだことがあっても、復習するときはやはり綿密に讀まねばならない。毎日二、三段くらい讀むのがよい。疑問のある箇所を讀むのではなく、疑問のない箇所こそ讀まねばならない。努力は、すべてそこにある。〔輔廣〕

(校勘) 朝鮮古寫本 正須↓政須

(注) 「重溫」は、復習するの意。「溫」は、『論語』爲政篇の「溫故而知新」を引くまでもなく、それ自體に「復習する、再度味わい直す」などの意味がある。『語類』の他の箇所では、「訓門人三」(一一五・2776)に、「溫尋」と熟して「只看近思錄。今日問箇、明日復將來溫尋、子細熟看。」と見えるのも、同じく「復習」という意味である。

朱子語類讀書法篇譯注(二)(興膳・木津・齋藤)

75 聖人言語如千花、遠望都見好、須端的眞見好處、始得。須着力子細看。工夫只在子細看上、別無術。淳。

聖人のことは色とりどりの花のようで、遠くから眺めてもすばらしいが、すばらしいところが手に取るようにはつきりわかるようであってこそ良い。綿密に讀むように勉めねばならない。努力は綿密に讀むことにこそあるもので、他に方法はない。〔陳淳〕

(校勘) 朝鮮古寫本 工夫只在子細看↓缺 別無術↓別無他術
(注) この條では、前條に引き續き、綿密に讀むことの重要性を説く。良いものを本當に良いとわかるまで理解せよ、という主張は、「訓門人五」(一一七・285)にも、「如看不好底文字、固是不好、須自家眞見得是不好。好底文字固是好、須自家眞見得是好。」と語られる。

「端的」は「まざまざと、はっきりと」の意。「自論爲學工夫」(一〇四・268)での、「這道理、須は見得是如此了、驗之於物、又如此。驗之吾身、又如此。以至見天下道理皆端的如此了、方得。如某所見所言、又非自會說出來、亦是當初於聖賢與二程所說推之、而又驗之於己、見得眞實如此。」という用例も同じ。

本條と、「別無術」を「別無他術」とする以外はすべて同じ條が、『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」に見える。

76 聖人言語皆枝枝相對、葉葉相當、不知怎生排得恁地齊整。今人只是心粗、不子細窮究。若子細窮究來、皆字字有着落。道夫。

聖人のことばは、すべて枝も葉もきちんと向かい合っているが、どうしたらあんなにしっくり並ぶのだろう。いまの人は、心が大雑把なものだから、綿密につきつめようとしない。綿密につきつめれば、どの字も落ち着くところがあるものだ。〔楊道夫〕

(注) この條と同様、「枝」と「葉」を對照させた修辭法を用いた例では、古く曹植の「艷歌行」に「出自薊北門、遙望胡地桑。枝枝自相值、葉葉自相當」とあるのが挙げられる。また、『語類』で、經書の記事を比喻して「枝葉」の概念を用いた例では、「總論爲學之方」(八・二五)の「學者若有本領、相次千枝萬葉、都來湊着這裏、看也須易曉、讀也須易記。」がある。同じ言ではないが、やはり聖賢の言を「枝葉がきちんと對應する」と形容する文が、『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」に、「答楊子直書曰、一生辛苦讀書、微細揣摩、零碎刮剔、及此暮年、略見從上聖賢所以垂世立教之意、枝枝相對、葉葉相當、無一字無下落處。」と引かれている。

77 某自潭州來、其他盡不曾說得、只不住地說得一箇教人子細讀書。節。

わたしは潭州時代以來、ほかのことは何も言わず、しょっちゅう言つて來たのは、綿密に書物を讀むようにということだ。〔甘節〕

(校勘) 朝鮮古寫本 一箇↓一个

(注) 朱熹が潭州知事に在任したのは、一一九四年(紹熙五年)のこと。

「不住地」は、口語で「絶えず」の意。

「怎生」は、「怎樣」に同じ。文語では「如何」に該當する。なお、「自潭州來」は、「潭州から歸つて」とも解し得る。

78 讀書不精深、也只是不曾專一子細。伯羽。

書物の讀み方が精しく深くないのは、集中して綿密に讀んでこなかったからなのだ。〔童伯羽〕

(校勘) 朝鮮古寫本 伯羽↓張卿(童伯羽のあざな)

(注) 『朱子讀書法』卷三「熟讀精思」に、「讀書不精深、只是不專一」とある。

(記錄者) 童伯羽 字は蜚卿。建寧府浦城縣の人。『師事年攷』163。

79 看文字有兩般病。有一等性鈍底人、向來未曾看、看得生、卒急看不出、固是病。又有一等敏銳底人、多不肯子細、易得有忽略之意、不可不戒。賀孫。

文章を讀む上で二種類の困ったことがある。一つは資質の鈍い人が、讀んだことの無い本を、讀んでも生半可で、にわかにはわからないのは、もちろん困ったことだ。もう一つは、資質は鋭い人が、綿密に讀もうとしないで、とかくなおざりな氣持ちになりがちなこと、かたく戒めねばならない。〔葉賀孫〕

（校勘）朝鮮古寫本 「有一等性鈍底人」固是病」を缺く。

（注）「一等」は、「一種」と同じ。

「看得生」の「生」は、「熟」の反義語。「訓門人八」（二二〇・3202）の「厚之臨別請教、因云、看文字生。曰、日子足、便熟。」からもわかるように、「いい加減に、生半可に讀む」ことを言う。

「卒急」は、『語類』では次のような用例があり、いずれも、「にわかに、急に」の意。

「如造化・禮樂・度數等事、是卒急難曉、只得且放住。」（大學五 或問下 傳五章）一八・326

「光祖說、大學首尾該貫、初問看、便不得如此。要知道道理只

朱子語類讀書法篇譯注（一）（興膳・木津・齋藤）

是這箇道理、只緣失了多年、卒急要尋討不見。待只管理會教熟、却便這箇道理、初問略見得些少時也似。」（訓門人八）二二〇・3262

「易得」は、「訓門人六」（一一八・2253）の「先生曰、文振近來看得須容易了。南升曰、不敢容易看。但見先生集注字字著實、故易得分明。」という例からもわかるとおり、「容易に成しうる」「しがちだ」の意。

素質の良くないものが、氣の利いた學習法を行おうとすることへの批判は、61條でも見られたように、各所で戒めの對象となっているが、これ以外には、「總論爲學之方」（八・225）の「大抵爲學雖有聰明之資、必須做遲鈍工夫、始得。既是遲鈍之資、却做聰明底樣工夫、如何得。」や、「自論爲學工夫」（二〇四・2261）の「看來前輩以至敏之才而做至鈍底工夫、今人以至鈍之才而欲爲至敏底工夫、涉獵看過、所以不及古人也。」などが挙げられる。

80 爲學讀書、須是耐煩細意去理會、切不可粗心。若曰、何必讀書、自有簡捷徑法、便是悞人底深坑也。未見道理時、恰如數重物色包裹在裏許、無緣可以見得。須是今日去了一重、又見得一重。明日又去了一重、又見得一重。去盡皮、方見肉。去盡肉、方見骨、去盡骨、方見髓。使粗心大氣不

得。廣。

學問し讀書するには、必ず根氣強く注意深く取り組んで行かねばならない。決して大雑把にしないこと。「讀書する必要はない、近道はあるもんだ」と言うのは、人を踏み誤らせる落とし穴だ。道理がまだわかっていないときは、まるで物が何重にも包まれているようで、簡単にわかりようはない。今日一層を取り去ればさらに次の一層が現れ、明日それを取り去れば、また次の一層が出てくる。皮をはぎ取ってこそ肉が現れ、肉を取り去ってこそ骨が現れ、骨を取り去ってこそ髓が現れるのだ。大雑把でがさつなことではダメだ。〔輔廣〕

〔校勘〕 朝鮮古寫本 悞人↓悞人 物色↓物

〔注〕 「耐煩」は、「我慢する、根氣強くする」ということ。

左に挙げるのはかつて「煎藥」の比喩として引いた條であるが、そこにも「耐煩」が見えるので、以下に再度引いておく。

「讀書要須耐煩、努力翻了巢穴。譬如煎藥、初煎時、須猛著火。待滾了、却退著、以慢火養之。讀書亦須如此。頃之、復謂驥曰、觀令弟却自耐煩讀書。」〔訓門人三〕一一五・2778)

「在裏許」は、「内部で」ということだが、この辭は、「大學一綱領」(一四・252)の「先通大學、立定綱領、其他經皆雜

說在裏許。」や、「中庸三 第二二章」(六四・1563)の「盡心是見得許多條緒都包在裏許、盡性則要隨事看、無一之或遺。」などの用例から窺えるように、句末に置かれる點で「在裏面」と區別することができる。

「何必讀書」は、『論語』先進篇の、「子路曰、有民人焉、何必讀書、然後爲學。子曰、是故惡夫佞者。」に基づく語。讀書法篇下の40條(一一・181)にも、「今人讀書、多不就切己上體察、但於紙上看、文義上說得去便了。如此、濟得甚事。何必讀書、然後爲學。子曰、是故惡夫佞者。古人亦須讀書始得。但古人讀書、將以求道。不然、讀作何用。」とみえ、何かと言ひ譯をでつち上げてさばろうとする學生への、同じく戒めのことばである。

「捷徑」は、「近道」の意。朱子の主張としては、近道を通うとする學問の態度は、「今之學者却求捷徑、遂至鑽山入水」〔訓門人一〕一一三・8343と言われる通り、當然忌むべきことである。

「切十否定形」は、「決してするな」の意。強い禁止。

「粗心大意」は、現代語の「粗心大意」に同じ。がさつなこと。

なお、前稿第11條にすでに引用した、「訓門人二」(一一四・8323)「聖人言語、一重又一重、須入深處看、若只見皮膚、便有差錯。須深沈、方有得。夜來所說、是終身規模、不可便要使、便有安頓。」は、このこと密接に關連する條である。

また、本條とほとんど同じ條が、『朱子讀書法』卷一「熟讀精

思」にみえるが、『論語』の「何必讀書」ということばは引かれていない。

81 觀書初得味、卽坐在此處、不復精研。故看義理、則汗漫而不別白、遇事接物、則頽然而無精神。揚。

書物を讀んで、いったんその味がわかったら、そこにあらをかいて、もう精しく考究しようとしなさい。だから、義理を見てもぼんやりしたままではつきりせず、物事に對處するにも、なおざりで心のこもらないことになるのだ。

〔包揚〕

（校勘） 朝鮮古寫本 缺

（注）「初く卽」は、「ひとたびくすれば」の意で、現代語では「一く就」に同じ。

「汗漫」は、「ぼんやり、あやふやである」ことを形容する疊韻の語。「論語一五 雍也篇四」（三三・835～837）では、程明道の「博學於文、而不約之以禮、必至於汗漫」という言を繰り返し引きながら、中途半端な學問の仕方を戒めている。

「別白」は、「訓門人六」（一一八・886）の「假如有五項議論、開策時須逐一爲別白、求一定說。」という例からもわかるように、明瞭であることを言う雙聲の語。

「頽然」は、蘇軾『東坡志林』「論修養帖」に、「世之昧者、

朱子語類讀書法篇譯注（二）（興膳・木津・齋藤）

便將頽然無知、認作佛也。」と用いられているが、「氣合いのもらない、やる氣のない」状態を指す。『語類』では、「頽塌」と熟した形であるが、「平日須提撥精神、莫令頽塌放倒、方可看得義理分明。」（『論語二六 憲問篇』四四・1147）と用いられるのも、同じ意味での用例である。

「遇事接物」は、「遇事觸物」「遇事應物」「處事接物」などともいわれる常套句。「一つ一つの事柄に對處する」の意で、『大學』の「格物」に通ずる概念を有す。「今且要收斂此心、常提撕省察。且如坐間說時事、逐人說幾件、若只管說、有甚是處。便截斷了、提撕此心、令在此。凡遇事、應物、皆然。」（『訓門人二』一一三・276）や、「格物窮理、有一物便有一理。窮得到後、遇事觸物、皆撞著這道理。」（『大學二 經下』一五・289）など、みな同趣旨の言である。

「無精神」は氣持ちが張りつめていない状態を言う。前稿第21條を参照。

（記錄者） 包揚 あざなは顯道。建章軍南城縣の人。『師事年攷』續310

82 讀書只要將理會得處、反覆又看。夢孫。

讀書では、よくわかったところを、とにかく繰り返し讀むことだ。〔林夢孫〕

（校勘） 朝鮮古寫本 夢孫→士毅（黃士毅のこと）

(注) 前出の73條と同じ趣旨の教えである。

83 今人讀書、看未到這裏、心已在後面。才看到這裏、便欲捨去。如此、只是不求自家曉解。須是徘徊顧戀、如不欲捨去、方能體認得。又曰、讀書者譬如觀此屋、若在外面見有此屋、便謂見了、即無緣識得。須是入去裏面、逐一看過、是幾多間架、幾多窗櫺。看了一遍、又重重看過、一齊記得、方是。講筵亦云、氣象匆匆、常若有所迫逐。方子。

「いまの人の讀書は、まだそこまで讀んでもいないのに、心はすでに先に行っている。そこまで讀んだと思ったら、もうすぐに捨て去ろうとする。こんなことでは、まったく自分から理解しようとしていないのだ。行きつ戻りつ振り返り、離れたくないようになってこそ、體得できるのだ。」また言われた、「讀書とは、家を見定めるようなもので、外から眺めて見たぞと思っても、わかったことにはならない。中に入って、一つ一つ、間取りはどうか、窓はいくつあるかを見なければならぬ。一通り見たら、さらに何度も見ても、みな頭に入ってこそ良い。」授業でもおっしゃった。

「氣分がせかせかして、いつも追いつて立ってられているようだ。」
〔李方子〕

(校勘) 朝鮮古寫本 如不欲捨去↓不欲捨去 逐一看過↓逐一看過 看了一遍↓看了一遍了 氣象↓意象

朝鮮古寫本・古活字本・刊本「講筵亦云」以下を細字に作る。
(注) 前半部と全く同じ言は、前出の46條にも見られた。恐らく、その條の記録者の楊至と本條の李方子は、朱子のこの言が發せられた場所に同席していたものと思われる。全體は三つの部分から成り立っているが、内容上の統一性はあまりない。第三部分は、教場での學生に對する小言であろうか。

「觀屋」や「間架」は、綿密な讀書の比喩に用いられるもの。例えば、「論語二・學而篇上」(二十・463)の「此正如看屋、不向屋裏看其間架如何、好惡如何、堂奧如何、只在外略一綽過、便說更有一箇好屋在、又說上面更有一重好屋在。」や、「訓門人八」(二一〇・288)の「譬如看屋、須看那房屋間架、莫要只去看那外面牆壁粉飾。」などの例がある。そもそも「間架」は、「間取り」さらに「部屋」という意であるが、本條と同趣旨の主張を展開する「中庸一 綱領」(六二・1480)の「讀書先須看大綱、又看幾多間架。如天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教、此是大綱。夫婦所知所能、與聖人不知不能處、此類是間架。譬人看屋、先看他大綱、次看幾多間、間內有小間、然後方得貫通。」という例からは、「間架」という語が、建築物の内部構造から轉じて、より下位の細かな項目という抽象的な意味で用い

られていることがよくわかる。

「窗櫺」は、「櫺子窓」「窓格子」または窓そのものを指す。

「匆匆」は、氣持ががせかせか落ちつかぬことをいう。「學七力行」(一三・二六)に「作事先要成、所以常匆匆。」とあるのも同じ。

「體認」は、前稿35條ですでに説明したとおり、「體驗」と同様、身を以て理解することを使う。朱子自身は、「或問、先生謂、講論固不可無、須是自去體認。如何是體認。曰、體認是把那聽得底自去心裏重複思量過。」(自論爲學工夫)一〇四・2616)のように定義する。

本條に該当する『朱子讀書法』の記録は、卷一「循序漸進」に、「在經筵時曾說、讀書者譬如觀此屋、若在外而望之、便謂見了、則無緣識得。須是入去裏面、逐一看過是幾多間架、幾多窗櫺。看一遍了、又重看一遍、都說得方是。」と見える。

84 看書非止看一處便見道理。如服藥相似、一服豈能得病便好。須服了又服、服多後、藥力自行。道夫。

書物を讀むのに、ひとところ讀んだだけで道理がわかるものではない。藥を飲むのと同じで、一度服用しただけでどうしてすぐに病氣が治ろうか。何度も何度も續けて飲んで、はじめて藥の效能が現れるものだ。[楊道夫]

(注)『朱子讀書法』卷一「熟讀精思」に全く同じ條が見える。

朱子語類讀書法篇譯注(一)(興膳・木津・齋藤)

さて、病氣になる、また藥を調合・服用することを讀書にたとえる例は『語類』に頻出するのだが、本條もその一つ。ただし、藥を根氣強く服用せよ、という趣旨の發言は、ここ以外には未發見。

85 讀書着意玩味、方見得義理從文字中迸出。季札。

讀書する時に、心を集中して味わえば、義理が文章の中からほとばしり出るようにわかるだろう。[季季札]

(注)「迸」は、「孟子三 公孫丑上之下」(五三・1283)でも「日用應接動靜之間、這箇道理從這裏迸將出去。」と用いられるが、文字どおり「ほとばしる」の意である。

「着意」は、「精神を一所に集中、安定させること」をいう。問、伊川言、未有致知而不在敬。如何。曰、此是大綱說。要窮理、須是着意。不着意、如何會理會得分曉。」「論知行」九・126)など。

(記錄者) 季季札 あざなは季子。徽州婺源縣の人。『師事年攷』未掲載のため、ここでは『朱子門人』の考證によった。

86 讀得通貫後、義理自出。方子。

讀みこなしてのち、義理はおのずから現れ出る。[李方子](校勘) 朝鮮古寫本 讀得↓讀書 また、末尾に、「今人爲學、

多只是漫、且恁地不曾是眞實肯做。」が續く。

(注) 通貫は貫通に同じ。本條は前稿31條と同趣旨の言である。なお、『朱讀子書法』卷二「熟讀精思」に全く同じ言が見える。

87 讀書、須看他文勢語脈。芝。

讀書では、必ずそのことばの氣脈を見なければならぬ。

〔陳芝〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

(注) 「文勢語脈」は、ことばの流れや勢い、言わんとする氣持ちなどを包括的にいうことば。「語脈」の、『語類』での用例は、以下の通り。

「聖賢說出來底言語、自有語脈、安頓得各有所在、豈似後人胡亂說了也。」(『讀書法下』一一・194)

「大凡看文字、須認聖人語脈、不可分毫走作。」(『論語三學而篇中』二一・198)

「如今看一件書、須是著力至誠去看一番、將聖賢底一句一字都理會過。直要見聖賢語脈所在、這一句一字是如何道理、及看聖賢因何如此說。」(『訓門人五』一一七・2812)

また、『朱子讀書法』卷二「虛心涵泳」に、「看文字、須看他文勢語脈」と見える。

(記錄者) 陳芝 字は庭秀。出身地未詳。『師事年攷』164

88 看文字、要便有得。

文章を読むとき、求めればものにできる。〔記錄者名を缺く〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

89 看文字、若便以爲曉得、則便住了。須是曉得後、更思量後面尙有也無。且如今有人把一篇文字來看、也未解盡知得他意、況於義理。前輩說得恁地、雖是易曉、但亦未解便得其意。須是看了又看、只管看、只管有。義剛。

文章を読むのに、わかったと思つてしまえば、それでおしまいだ。わかったら、その先があるかどうかを考えねばならない。例えば、いま一篇の文章を読んでも、その意を理解しきれないから、まして義理などわかるはずがない。前人がこんな風に言っているのは、いくらわかりやすくても、すぐその意が會得できるわけではない。何度も何度も繰り返して読むこと。とにかく讀んでもものにするのだ。〔黃義剛〕

(校勘) 朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 他意→它義

(注) 前出69條に同じ趣旨の言が見えるのを参照されたい。

「未解」の「解」は、「不解」の「解」と同じで、「不會」の意と考えて良い。「不解」の『語類』例には、次のようなものがある。

「看來世上自有一般人、不解恁地内直外便方正。只是了得自身己、遇事應物、都顛顛倒倒沒理會。大學須是要人窮理。今來一種學問、正坐此病。只說我自理會得了、其餘事皆截斷、不必理會、自會做得。更不解商量、更不解講究、到做出都不合義理。」
〔訓門人八〕一一〇・2883〕

「且如」は第4條に既出の語である。「たとえば」という意。

90 讀者不可有欲了底心、才有此心、便心只在背後白紙處了、無益。揚。

讀書する者は、読み終えよう、という氣を起こしてはいけない。このような氣を起こせば、意識は後ろの白紙に行ってしまう、ためにならない。〔包揚〕

（校勘）朝鮮古寫本 缺

朝鮮古活字本 讀者↓讀書

（注）「才（纔）便」は、現代語では「一く就く」に同じ。前稿29條の注参照。

91 大抵學者只是在是白紙無字處莫看、有一箇字、便與他看

朱子語類讀書法篇譯注（二）（興膳・木津・齋藤）

一箇。如此讀書三年、無長進處、則如趙州和尚道、截取老僧頭去。節。

およそ學ぶ者は、とにかく白紙の文字のないところを見ようとしてはならない。一つ文字があれば、その一字を一字として讀むのだ。こんなふうにも三年も讀書して、進歩がなければ、趙州和尚じゃないが、「わしの首をくれてやる」だ。〔甘節〕

（校勘）朝鮮古寫本 只在↓只有 一箇↓一个

（注）趙州和尚とは、唐の高僧從諗のこと。『景德傳燈錄』十「趙州觀音院從諗禪師」、『宋高僧傳』十一「唐趙州東院從諗傳」に傳が見える。彼には語録の『趙州錄』があり、本條所引の「截取老僧頭去」は、その巻中に「但究理而坐、二三十年若不會、截取老僧頭去。」と記録されるものによる。

「與」は、「將」や「把」に同じ。

92 人讀書、如人飲酒相似。若是愛飲酒人、一盞了、又要一盞喫。若不愛喫、勉強一盞便休。泳。

讀書とは、酒を飲むようなものだ。上戸は、一杯が空になつたら、もう一杯飲みたくなる。下戸なら、無理して一杯飲めばおしまいだ。〔湯泳〕

(注) 飲酒を讀書法に擬するのは面白い比喩であるが、『語類』では本條以外にも、『論語』一三 雍也篇二(三・一・785)に「人只是一箇不肯學。須是如喫酒、自家不愛喫、硬將酒來喫、相將自然要喫、不待強他。如喫藥、人不愛喫、硬強他喫。」という同趣旨の譬が見られる。

(記録者) 湯泳 字は叔永。鎮江府丹陽縣の人。『師事年放』

續271。

譯注者後記 本稿作成の過程で、大野圭介、幸福香織、田口一郎、多田伊織、福田知可志、吉川雅之の諸君による譯注の草稿を参照した。謝意を表する。